



橋本孝男芽室町甜菜対策協議会会長（写真右）と辻勇立会人責任者（写真左）。糖業が衰退すると農家だけではなく町全体に大きな影響が出ると語る。

この安定作物 ビートを守れ

芽室町甜菜対策協議会会長橋本孝男さん（共栄）と、同立会人責任者辻勇さん（北伏古）生産者として今年の作況とビート生産について聞いた。

『平成8年も同じような傾向でした。夏の高温、一度に大量に降る雨の影響で作況は伸び悩みました』辻さんは10アール当たりの収量は平均

日高山脈を背に続けられる収穫作業。剣山にはうっすらと雪が積もる。



で100kgは落ちるのではと推測する。

今年には根腐病と黒根病が出た。これも地域によって差が出た。芽室町は十勝の中でも気温が高く、町内でも海拔の関係で気温差があり、被害にあった農家も少なくないという。根腐病は頭から腐り、黒根病は中から腐り、葉を見てはわからない。

『昭和30年ころは11月3日といえれば必ず雪が降っていました。今では11月の末でもあたたかい日が続きます。世界的と言われていますが、芽室町の農産物に大きな影響があります』と気象の変化を心配する。

日甜（株）でもこれらの病気に対して警告し同時に研究を進め日甜の存在は心強いと一人は口をそろえる。

『ビート作の一番の障害は「コストがかかる」ということ。2月からハウスを準備して、3月中旬に育苗する。そして10〜11月に収穫する。つまり一番長い生育期間を持つ作物。5月のビートの移植は大変な作業、日高おろしには本当に悩まされま

す。砂糖植えたばかりのビートの葉が「たたかれる」のです。二つ目に「砂糖余り」があります。政策的な問題になってしまいましたが、作付面積は当然減らされます。外国から安い砂糖が輸入されるためです。三つ目に消費者に砂糖に関する「間違ったいメージ」があるのも大きな問題でしょう。子どもたちの「キレる」現象を砂糖の取り過ぎるからという特集がテレビ放映されましたが、甜菜対策協議会では放送局に抗議しました』と辻さん。

『農家もコスト面では厳しいということは分かっています。だから日甜さんといっしょに取り組んでいる。気象の影響は受けてもビートは安定作物。野菜のように厳しい市場や豆のような投機的なものとは性格を異にする。輪作体系にとっても必要な作物です。昭和30年までの豆、それ以降のビートは作付形態をガラリと変えました。連作により土壌に無理がかかる。黒根病はそうした土壌からの問題もあるのです。いずれにしても糖業がなくなってしまうと芽室町全体に大きな影響が出ます。日甜さんもさまざまな産品開発を行っています。ぜひ消費者の皆さんにビート、砂糖の正しい認識をしていただきたいですね』と橋本さんは訴える。

糖分買い入れ制度とは 【とうぶんかいれせいど】

1986年からは、糖分による買入制度が導入され、株立本数増加、窒素減肥等、蓄積した試験研究の成果を農家が積極的に活用したので、特に歩留まりが一段と進展した。ビートの貯蔵方法も、冬期間の堆積中の品質維持のため、シート被覆、徐土、天場空間の設置、大型堆積などにより、凍結防止、低温貯蔵技術が確立され、大きな成果をあげ、世界的にも貴重な事例となっている。



収穫され畑に積まれる土にまみれたビート。現在は土場ではなく直接工場に運ばれていく。これもコストを下げるためである。



ハーベストの後を残したビートがないか点検し手で拾う。春から育てた作物を1つとてむだにはしない。

収量と 糖度の話を 知る



畑ではトラクターにけん引されたビート収穫機が、晩秋の落日を背に忙しく畑を駆け巡った。生産から加工までの過程で合理化を進め、生産費を引き下げるなど挑戦が続けられている。今年のビートは、猛暑の影響で糖分が失われ、収量の低下も心配された。しかし、芽室町は『その年の改善点は次の年に生かす。これが毎年、収量・糖分とも高い水準に位置している理由だ。この大地でビート糖の生産はいつでも続く。長年の経験で糖度を維持しカバーする。

今年のビートは夏の猛暑の影響を大きく受けたと言われている関係者に尋ねた

猛暑の影響を受けた甜菜

ビートの生育は7月中旬までは順調だったが、その後の長雨で土壌が多湿となり、黒根病が多発し、根腐病も見られた。さらに猛暑が追打ちをかけ、生育に悪影響を与えた。長雨、猛暑、と生育の停滞、病害などで収量、収穫量の低下が心配されている。



ビート収穫作業をする坂本芳隆さん（美生）。やはり今年の作柄はよくないと言う。



ビート一つ（約10から、カップ1杯分（約170g）ほどの砂糖ができる。これが17%といわれる糖分だ。

10月15日十勝管内のトップを切って、芽室町で甜菜の収穫が始まった。日本甜菜製糖株式会社と契約している久世勇さん（中伏古）さんの畑。『平年は20日ころからでこんなに早かった収穫は経験がない』と言う。久世さんは今年の収量について『高温の影響で根腐病、葉腐病の発生が目立つが、1ヘクタール65トンを予想しており、平年に比べ収量はいい。ただ糖分がどうか』と心配した。

『本当に作柄がよくないのか美生の坂本芳隆さん（美生）にも聞いてみた。』

『確かに今年の夏の異常な暑さはビートに影響がありました。全町的に「黒根病」が出ました。ビートの立会でもそういう話が現実に出ています。「治療の余地」がないという感じですね。取れている人は10アール当たり7.5トンの農家もいて、糖分も17%から18%の人もいます。15%台がほとんどでしょう。私の畑からは12月になってから日甜に運ばれます』と語った。

日本甜菜製糖株式会社芽室製糖所管内の本年度の甜菜作付け面積は1万6千8百ヘクタールで、うち芽室町は22パーセントに相当する3千7百ヘクタールの作付けとなっている。芽室原料事務所では『町内平均収量は平年作を上回る1ヘクタールあたり58・5トンを見込んでいる』と話し、今年の特徴として根腐病が多いと指摘している。さらに同製糖所では『全体に糖分は低い傾向』で根腐病による糖分減の影響もあるが、1月に入り気温の寒暖差がある気象条件になってきていることなどから『17%をクリアしてほしい』としている。

同製糖所では、原料ビートの糖度は昨年より0.3ポイント上回る16・5%と見込むが、収量が下がっていることから、来年5月中旬までの製糖期間の予想生産量は、昨年より約1万5千トン下回る約15万8千トンと見込んでいる。